

問題を抱えた生徒に対する対応

神谷 かつ江（教育心理学）

1 はじめに

平成7年度より発足したスクールカウンセラー活用調査研究事業はその後大きな発展を遂げ、平成17年度には県内すべての中学校にスクールカウンセラーが配置された。筆者も平成13年より小中学校に派遣され、中学校3校、小学校8校を担当してきた。この間児童・生徒をはじめ保護者、学級担任、養護教諭、学年主任、近隣住民の方などさまざまな人との出会いがあり、胸の内に抱える悩みについてお話を聴かせていただいていた。

友だちづきあいが苦手で対人恐怖症に陥ってしまった生徒、軽度発達障害があるために教室に居場所がなくなってしまった生徒、父親から激しい暴力行為を受けて学校ではまったく話さなくなった緘黙の生徒、カウンセラー中に離婚をしてしまった母親、生徒から嫌われてノイローゼ状態になってしまった教師など、さまざまなケースを紹介していただいた。どのケースに当たっても真摯な態度で取り組んできたつもりだが、限られた時間内でのスクールカウンセラー業務には限界があり、対応の遅れに問題行動が深まってしまうことも否めなかった。

問題を抱えた生徒を受け持つ学級担任の悩みは尽きない。とくに中学校では思春期を迎えた生徒たちが、不安で揺れ動く心を最も身近な対象である担任教師にぶつけてくる。

親しくしていただいた先生の中には、両足のふくらはぎが青く腫れ上がってしまった人がいた。男子生徒から足蹴りされたからである。不登校傾向の女子生徒を自宅まで迎えにいった、両腕を爪で引っかかれた先生もいた。ときには体を張らなければならないときもある。激しい攻撃性を向ける生徒がいる一方で、学校生活をともしする学級担任は生徒たちにとってかけが

えのない存在だ。生徒たちは学級担任にさまざまなことを求めてくる。

ひとりひとりの児童生徒の実態を踏まえた見通しのある支援は、問題を未然に防ぎ、早期対応に役立てることができる。問題行動のサインに気づき、生徒の心の動きを早期にキャッチできるのは、生徒たちの最も身近な存在である学級担任において他にいない。学級担任が果たすべき役割は大きい。そこで本論ではこれまでの臨床経験や文献を参考にしながら、問題を抱えた生徒に対して中学校での対応についてまとめてみたい。

2 問題を抱えた生徒の特徴

スクールカウンセラーからみた問題を抱えた生徒の特徴は、自己中心的で自分勝手な行動をする生徒、人の気持ちが汲み取れず共感性に欠ける生徒、人の話を聞かない生徒、人に対して攻撃的である生徒、暴力を振るう生徒、勉強意欲のない生徒、無気力な生徒、集中力がない生徒、うそをつく生徒、忘れ物が多い生徒、遅刻や欠席が多い生徒、反抗的な態度をとる生徒などがあげられる。また、顔色がわるく覇気がない生徒、何事にも無関心で意欲が感じられない生徒なども、家庭的問題や学業的問題で本人が悩んでいることが多い。

3 学校担任のメリット・デメリット

学級担任が教育相談を行う際のメリットとデメリットについて考えてみる。

学級担任のメリット

① 学級担任は問題行動を早期に発見し、対策を講じることで可能である。担任はクラスの

生徒と毎日顔を合わせる機会があり、注意深く観察すれば、生徒の態度や表情の変化を見つけることができる。早めに声をかけ、話を聞くことができれば、問題を深刻化する前に解決の方法を探ることができる。

- ② 集団の特徴を生かすことができる。教師ひとりひとりの力では自ずと限界がある。学級内の人間関係の力を利用することによって問題解決に至ることも多い。また班の編成替え、席の移動、係りの仕事など担任ならではのものである。
- ③ 日常の教育活動におけるさまざまな場面を利用できる。授業中や給食、掃除の時間などを利用し、わずかなかわりが相談的な効果をもつこともある。さまざまな機会を積極的に利用することが必要であり、それが担任の特権でもある。
- ④ 日常的な学級担任の役割の中で、生徒を理解するための情報や資料が得やすい立場にある。この点については、日常的な心がけが必要であり、観察の目を養ったり、対話を心がけることによって、より多くの確実な情報を得るようにする。

事 例

学級担任に親愛を寄せていたA君

A君は家庭的にさまざまな問題を抱えている生徒であった。3人兄弟の父親は皆違うと噂されていた。現在の父親は弟の実父であるが、A君にとっては3度目の父親である。養父はA君をかわいがってくれた。しかしその養父も母親と不仲になり出て行ってしまった。学級担任はA君の家庭的環境を心配しA君のよき理解者だった。そんなA君をびっくりさせることがおきた。学級担任が転任することになったのだ。そのことを知ったA君の悲しみは大きかった。3年生になり、新しい担任が着任した。その翌日からA君は学校に来なくなってしまった。

学級担任のデメリット

- ① 性格的に内向的な生徒、勉強が苦手な生徒、学校が嫌いな生徒、集団活動が苦手な生徒は、学級担任に相談することに抵抗や拒否的な気持ちをもつことがある。また俗にいう、相性

が悪い生徒がいることもある。こうした場合は問題の対応に困難を伴うことが多い。

- ② 生徒にも保護者にも担任は評価する存在と映ることが多く、内面的なことや、自分に不都合なことを話すことにためらうことがある。その結果、表面的なことや、自分に都合のいいことばかり話し、本当のことはわからない場合もある。
- ③ 教師は一般的に教える、説得するなどが多く、また叱り、注意するという行動も多く見られる。こうした行動傾向は相談的な姿勢や方法と相反することが多く、その結果、相談的な関係が成立しなくなる恐れがある。
- ④ 学級担任という立場に置かれると、自分の学級の生徒は自分がすべて責任をもち、自分がすべてを把握し、自分が問題を解決しなければならないという使命感をもつことがある。このようにすべてを抱え込んでしまうと、その結果として、問題を深刻化させることがある。

事 例

学級担任と相性が悪かったBくん

B君は学級担任の女性教師が嫌いだった。その担任の前では故意に悪い生徒になった。教卓の上を土足で立ったり、名前を呼ばれても返事をしなかった。B君は家庭的に恵まれない生徒だった。B君が小学校3年生のとき両親が離婚し、二人の子どもは父親に引き取られた。B君の夕食はいつもコンビニ弁当か出前だった。B君は寂しかった。そのさびしい胸の内を担任にわかってほしかった。しかし担任は理解を示さないばかりか、B君の問題行動のみにヒステリックに叱責した。

4 校内の組織と連携

連携できる組織をつくる

問題行動が発生したとき、学級担任は自らの指導不足を嘆き、自責の念に駆られるときがある。とくにさまざまな問題が学級内で生じてクラス崩壊状態であるとき、どうしていいかと途方に暮れる。

学級担任が問題を一人で抱え込まないためには、

連携できる組織をつくることである。このことはあまりにもあたりまえのことであるため、見過ごされがちである。以下に手順を示す。

- ① 連携するための最小単位である報告、連絡、相談を効率よくすること。
- ② 業間の休み時間や放課後に、お茶を飲みながらでも学年の教師全員が集まることで、雑談の中で情報交換すること。
- ③ 可能であれば、帰宅時に学年主任に一日の様子を話してから帰宅する。
- ④ 養護教諭のいる保健室は、生徒にとって心の休まる場所である。生徒は養護教諭に対して本音で話やすく、そのことによってカウンセリングが展開することもある。養護教諭に生徒を紹介したり、情報を交換すること。
- ⑤ 学校だけの指導では難しいと思われた場合はスクールカウンセラーにアドバイスを求めたり、生徒の保護者に専門機関を紹介すること。

問題行動の対応には教員組織のチームワークが鍵となる。組織として対応するためには、役割に応じて責任や権限が明確になっていること、報告、連絡、相談の系統がはっきりしていて情報の窓口が一本化されていること、対応の手順を誰もがわかっていることなどが必要であろう。

5 組織的な連携指導の実践

問題行動が発生した場合、いち早く組織的に指導会議を持たなければならない。秘密裏に行わないで、多くの関係者を集めることが必要である。会議のメンバーとして、校長、教頭、学年主任、学級担任、養護教諭、教育相談担当、生徒指導主任、スクールカウンセラーなどが一堂に会して共通理解を得ることが大切である。会議の進め方としては

- ① 時間の経過をおって問題行動を説明する
担任が事実のみに従って経緯を説明する。
自分の思いや反省は省略して客観的事実を報告する。
- ② 会議のメンバーが情報を追加する
学級担任の説明の後、メンバー全員で関連

情報を出し合う。時間をさかのぼって気になることを話し合うと、生徒の心情や問題発生の背景が見えてくることもある。

- ③ すべての情報を黒板に板書する
板書することによって、共通理解を深めることができる。事前にプリントを配布してもよいが、会議終了後は回収してシュレッターにかけること。
- ④ 誰がどのように関わるか対応を考える
すぐにしなければならないことは何か、継続して行うことはなにか、校長、教頭、学級担任、学年主任、養護教諭などが、それぞれの立場でできることを考えて対応のシステムをつくる。
- ⑤ できれば全職員に報告と協力を要請する
たとえ担任が一人に対応することになっても、それを全職員が知っていることが大切である。始めのうちは何で関係のない私たちにまで一々伝えるのという気持ちになることもあろうが、学級担任が問題を抱え込まなくてもいいような雰囲気をつくることが大切である。
- ⑥ 問題の解決と評価
問題への対応が一段落したところで、職員室の中で今回の対応はどうだったか振り返ってみる。
学級担任を取り囲むソーシャルサポートが、問題行動を解決するための基本である。

6 問題別対応

次に学校現場で日常的に発生する問題行動の対応を考えてみる。

○不登校傾向の生徒に対する対応

学校基本調査によれば、2007年度の長期欠席者（30日以上欠席者）のうち、不登校を理由とする児童生徒数は12万9千人（2千人増加）いることが判明した。中学校の全生徒数に占める不登校の比率は、34人に1人という、極めて深刻な状況になっている。

鍋田によれば以下の5つのタイプが見られる

という。

① 浮遊タイプ

このタイプの特徴は本人に困っている様子が見られない、同様に親もさほど困っている様子を感じられないタイプである。このタイプは親子間に必要なコミュニケーションがほとんど成立していないことが要因となることが多い。共働きで仕事に追われて情緒的なかわりがほとんどないとか、母子家庭で二人きりなのに、その二人の間すら会話がなとか、特に親が独特の価値観を持っていて子どもに関心が向かないタイプ。学校に通う必要性を感じていないため、いじめなどをきっかけに休むようになる。カウンセリングをしても手ごたえがなく、なんとなくつきあっていると相手に思われてしまうのが特徴である。

② 一見すると元気なタイプ

このタイプは元気でてきばきとして表情も豊かでエネルギーが感じられる。アニメやコンピューターに造詣が深く、その話題のときはいきいきとしている。自己中心的に周囲のものが動いてくれるとご機嫌であるが、周囲が動かなくなるとストレス状態となり、ここで頑張らねばというときに、投げやりになったりしらけてしまうタイプ。

③ 対人関係消極タイプ

1対1では元気だが、集団が苦手で自分から関係がつかれない。誰とも関係をつくれないうまま、苦しみながら何とか過ごしているタイプ。高校生や大学生にみられる。完全に不登校というより、半不登校状態であることが多い。

④ フリースクール症候群

不登校のためにフリースクールに通っていた子どもをいう。守られた環境の中では元気だがその状況から逃げ出せず高齢化してしまった子どもをいう。

⑤ ひきこもり

中学生のひきこもりは心を閉ざしているという意味でのひきこもりである。長期化するとひきこもりが本格化し、ニートとなっていくものも多い。

筆者の臨床事例では上記に加え、親子問題・家庭問題を背景としているものが多かった。両親が離婚をして母親と二人きりだが、母親は生活のため昼夜を通して働かなければならなくなり、疲れた母親の後ろ姿を見てこれからの自分の未来に絶望したケースや、父親が定職につかないため家庭内のいざこざが絶えず、離婚してしまったケースなど、本人の力では改善できない家庭内不和の生徒に多くみられた。また、友だちとのささいないざこざや学業不振から不登校になってしまった生徒もいた。

以上みてきたようにさまざまな要因により不登校は発生するが、いずれのタイプも関わりを持ちながら根気よく継続することである。筆者が行ってきた対応を紹介する。

① 日ごろから子どもの様子をよく観察しておくこと。

いきなり不登校になることはない。何らかのサインを送っている。表情が乏しく、顔色が悪い、笑わなくなった、ひとりでボーとしている、遅刻・早退をするようになった、頭痛や腹痛を訴える、保健室に頻繁にいくなどの状態がみられたら、要注意である。

援助の仕方は居場所をつくりつつ関わりつつけること。教室に入れない場合は、相談室に居場所を確保する。

② 病気などを理由に3日休んだ場合は必ず本人に連絡を取る。最初の1週間の対応が重要である。頻繁に家庭訪問をおこない、本人の気持ちに沿って話を聴く。すぐに対応できそうなことはするなど、節度ある押し付けがましさが求められる。

③ 不登校が長期化してしまった場合は、登校できるかできないよりも本人自身が元気になることが大事という立場が伝わるような接し方で対応する。

できれば適度な頻度で定期的に家庭訪問する。会えれば幸いであるが、会えなくても失敗ではない。子どもはその気配を感じている。また会えても深追いはしないで、元気になってくれることが大切だと伝わる態度で臨むよ

うにすること。

- ④ 事情が明らかになるに応じてその後の対応を検討する。

○教師に心を開かない生徒の対応

教師に心を開かない生徒が増えている。インターネットや携帯電話の普及に比例するかのよう、教師の呼びかけに無反応の生徒が増加しているように感じる。

- ① 家庭的に問題を抱えている女子生徒の場合、男性教師は父親と同一視される傾向があるため、敬遠されたり煙たがれたりすることがある。担任である男性教師に心を開かない場合は、女性教師や養護教諭と連携を繋ぎ、かわりを続ける。

- ② 話さない生徒、話すことが苦手な生徒は運動やゲームをするなどの柔軟な対応を工夫する必要がある。

将棋やオセロ、トランプなど生徒と教師が楽しみながら行えるものがおすすめである。

- ③ 過去に教師と信頼関係を築けなかった生徒は、担任教師を過去の教師に投影し、ネガティブな教師像を抱きやすい。彼らの行動や症状の奥には、秘められた劣等感や欲求不満、葛藤などがあり、そうした彼らの気持ちに目を向け、共感しようという姿勢を忘れないことである。

- ④ 多くの場合は適切なかかわりを続けながらその成長を待つことで、解決につながることもあるが、教師としてはその間も見捨てることなく、待つことで温かく見守ることである。

○自主的に教師に相談を求めたときの対応

日常のさまざまな関わりにより、生徒から信頼できる教師であると認知されれば、自主的に相談を求められることがある。ただ生徒にとって、教師に相談することは抵抗感が強いことも多く、実際にはそれほど多くはない。また相談する場合も、些細な事柄から話し始めたり、雑談風であったり、知り合いの人の相談と比べてみたり、また教科の学習のことであったりと、

深刻な問題であってもそれを表に出さないことが多い。

- ① 自主的な相談があった場合には、安易に表面的なことで片付けてしまわず、じっくり話を聴くことを忘れてはならない。急に相談を持ちかけられたときも、いつもの態度で嫌な顔などしないこと。生徒は勇気をもって相談に来てくれたのだからという思いを大切に、平静に装うこと。

- ② そしてその気持ちに目を向けて、それを共感的に理解しようところがけること、生徒が自分で解決することを援助することなどに注意することが大切である。

- ③ 時間の都合で十分に話が聴けない場合は、次につなげることも考えておくこと。

○保健室登校をする生徒の対応

保健室登校は担任の勧めや養護教諭の勧め、本人の希望によって始められることが多いが、養護教諭の負担は過大なものである。受け入れる前に次のことを考えておく必要がある。

- ① 保健室登校を受け入れることが最善の選択なのか、
- ② 養護教諭がかかわりをもてるか
- ③ 担任とうまく連携をとってやっていけるか
- ④ 校内で共通理解が得られるか
- ⑤ 保健室登校が必要であったなら、養護教諭にできること、できないことをはっきりさせ予測させる事態について可能な限り対応策を話しておくことが求められる。

生徒への対応として生徒はかなり不安定な状態で登校しているということを忘れないこと。また毎日登校することを約束したり期待したりせず、生徒の心の内面の変化をよくみていくようにする。保健室と教室の間は一つ階段があるので、そのつなぎは、焦らずゆっくりと時間をかけて、その生徒の立場を考えて、他の教師や生徒たちと協力してもらうことが必要である。養護教諭と担任、校内の共通理解と一貫した姿勢が特に大切であろう。

○無気力な生徒への対応

勉強意欲がない、クラブにも入部しない、趣味もないという無気力な生徒がいる。担任からの呼びかけにも無反応で、表情は乏しく、「別に」といってかわりを持とうとしない。中学生になった今に始まったとも思われず、この子が無気力になったのはいつごろからであろうかと考えて込んでしまう生徒がいる。どうして無気力になってしまったのであろうか。

人は何回やってもうまく行かないという失敗経験が重なると無気力状態に陥りやすいという。また自分の行動と関係なく成功する経験も、それが何回も続くことにより無気力状態をもたらすものである。富裕層の子どもが、自分の欲求とは関係なく親から高価なものの買い与えられ続けたら、物を大切にすることで達成感を得ることができなくて空しくなるであろう。この両者からいえることは、本人の意思に関わらずコントロール不能な状態が継続すると、人間は無気力状態になってしまうということである。

また無気力の原因をどこに求めるかで対応が違ってくる。失敗の原因を自分の能力不足に帰属するか、努力不足に帰属するかで無気力の程度が違ってくる。生徒が同じ失敗をおかしても失敗は成功のもととばかり、失敗経験が別の行動に良い影響を及ぼすことがある一方で、逆に二度あることは三度あるとやる気を失い、後の行動に悪影響を及ぼす場合がある。生徒の失敗経験を主観的にどう受け止めているかが指導のポイントとなる。

「自分はだめな人間だ」「何をやっても無駄だからあきらめよう」と思っている生徒は、何事かを達成した経験が乏しく、また親や教師からほめられた経験が少ないという特徴がある。このような生徒に自信を与えるには、まず明確で具体的な言葉を用いて、生徒の達成意欲をかりたてるような目標設定を行うことが肝要である。その場合は、必ず言葉を用いてほめなければならない。わずかな進歩や努力の形跡が見られたときは、認めてあげて言葉がけをすることである。親や教師のなにげない一言が、生徒の無気力をも解消し、また促進するということを忘れ

てはならない。

○迷惑をかける生徒への対応

迷惑をかける生徒がいる。顕著な問題行動は見られないが、落ち着きがない、なかなか着席しない、周りの生徒にちょっかいを出し授業妨害する、集団行動がとれない、自分勝手な行動をする、授業中でも平気でおしゃべりするなど、周りのクラスメートに迷惑をかける生徒である。注意をしてもどこか他人事で、本人はそのことを反省するふうでもなく、あるいは感じないようにしているのか、心が通じにくいのである。このような生徒の対応には本当に苦勞をする。このような生徒は本来ならば入学前に身につけておくべき多くの事柄について、教えてもらっていないことが多く、集団内でとるべき行動や学習態度が身につけられないまま今になってしまのだ。学校生活は40名近い集団が同じことを学習する場である。そのために基本的学習態度として、授業中は座っていること、まわりに配慮して行動すること、順番を待つことが随所で求められる。しかし学習できないまま中学生になり、学業の難しさと相まって迷惑行為が数段と増すのである。このような迷惑行為に対して教師側は否定的な判断を下すことになり、叱責や無視といった、ただその行動を抑制するだけの態度をとりがちになりやすい。担任教師に否定的な評価を下された生徒は、失敗経験を積み重ねて情緒は不安定となり、ますます行動はおちつかなくなるという悪循環に陥ってしまうのである。

この連鎖を断ち切るにはどうしたらよいか。それにはまず生徒を観察することである。迷惑行為はいつも起こるとは限らない。いつ、どこで、どのように表れるか、また反対に、いつ、どこで、どのように適切に行動しているのか、この両場面の状況をよく比較して、生徒の行動を分析し見極めることが重要である。そしてその行動がなぜ起こるのか、注目されたいためか、その場から逃げたいためか、防衛しているためか、という行動の意味に着目する。そして手間隙を惜しまないで、根気よく教えることである。

○ いわゆる重篤といわれる生徒の対応

拒食症や過食症などの摂食障害の生徒、自分の手首を自傷する生徒、統合失調症の前駆症状がみられる生徒が僅かながら存在する。このような生徒は色々な問題を抱えていることが多く、長期化し慢性化していく傾向が強い。担任教師は忍耐強く根気よく援助していくことが求められる。また、保護者との連携が不可欠であるため、担任教師が一人で抱え込むのではなく、スクールカウンセラーや教育相談員に相談してほしい。情緒的に不安が強い場合は専門機関につなぐことも大切である。

7 保護者への対応

不登校傾向やいじめ、非行などの深刻な問題が生じたときは、問題の解決に当たって、教師と保護者への協力・連携による指導が一層重要になる。問題の背景には、学校生活や家庭生活における不調や不適応が見られるときが多く、その意味でも両者の連携は不可欠である。以下に保護者への対応について考えてみる。

① 教師の誠意ある指導を前提に

指導が困難な事態では、教師はともすると苛立ち、絶望的となり、指導の限界を感じて無気力状態になりがちである。しかしこのような事態の中でこそ、教師が指導の具体的な手立てを考え、それに基づいた指導をおこなうことが求められる。

問題の責任を一方的に押し付けて非難したり、生徒を形式的に叱責するだけでは問題の改善はかえって困難にする。

指導の方法を吟味し、教育相談の態度や視点を積極的に取り入れるなど、まず教師による指導を熱心におこなうことが重要である。その熱心な指導が、その保護者との連携の契機となる例が極めて多いのである。

② 保護者の気持ちを受け止める。

生徒がさまざまな問題に陥ったとき、最もつらく悲しい思いをするのは生徒と保護者で

ある。その心の痛みを教師が適切に受け止めることから、保護者とのかかわりをスタートさせなくてはならないだろう。保護者と面接を行う際も、保護者の緊張や不安、動揺をよく観察して対応することが肝要でいたずらに非難したり、一方的な態度で接することがないよう心がけたい。

生徒の抱える問題についても、事実は事実として冷静に伝えながらも問題の背景やそれに対する教師の指導や経過について話し合い、保護者の考えを聴き、解決についてともに考えて連携する姿勢を堅持したい。

③ 生徒の良いところを保護者に伝える

教師が保護者と生徒の問題について話し合うとき、目の前の母親の状況を把握するよりは、生徒の問題点に焦点を当てるような関係の持ち方をしがちである。このことは母親にわが子の問題点を指摘されたと感じてしまいがちなので、母親が落ち込んだり、ストレスを抱え込んでしまう結果となる。そしてその攻撃性をわが子に対して向けてしまうということも十分に考えられる。学校生活での生徒の良いところ、がんばっているところを積極的見つけ出し、保護者に伝えるように心がけたい。

④ 保護者と連携するときの態度

保護者に限らず誠意ある態度は教育相談の基本である。それを紹介したい。

1) よく聴くこと

保護者の話を保護者の立場に立って、その気持ちを汲みながらつながりを深めようにしたい。気持ちのつながりのないままの説得は反発と不信を招くのみとなる。

2) 誠意ある態度で接する

保護者との連携は人間的連携を軸につくられる。ふだんからの教師と生徒との関係において強い信頼関係が形成されていることが、そのまま、保護者との連携にも当てはまるのである。

3) 根気よく連携をすすめる

教師の側から考えると、生徒の指導につい

て、保護者との意見の一致や協力が思うように得られないとの思いが少なくない。しかし、家庭における生徒の養育態度や、家庭生活のリズム、生活スタイルなどはそれぞれの家族の長い歴史をもつもので、それらが生徒の成長にさまざまな影響を与えたとしても、短期間のうちに改善することは現実には容易ではないだろう。建前論で性急に問題点を指摘するだけでは解決につながらない。根気強く相互の連携をふかめていくことが必要であろう。

8 おわりに

スクールカウンセラーとして学校現場を目の当たりにして、学校ではさまざまな問題が山積していることがわかった。めまぐるしく変わる学習指導要領、対応の難しい生徒の増加、モンスターペアレントといわれる保護者の増加、休日返上の部活動指導など、現場の教師はその対応に忙殺されている。教師の精神的疾患が年々増加しているのも分かるような気がした。ある調査によると、教師の73%が生徒と向き合う時間の不足を訴えている。生徒ともっと向き合っていたいという教師は多い。問題を抱えた生徒の対応は、教師が生徒のことを気にかけて、つながりを絶やさないようにすることが重要である。生徒と向き合う時間を確保するためにも、職務に専念できる勤務条件の整備を願ってやまない。

引用・参考文献

- ・内山喜久雄・山口正二編「生徒指導・教育相談」ナカニシヤ出版 2000年
- ・小林一也・水越敏行「教育相談」きょうせい 1994年
- ・鍋田恭孝「心の科学・学校不適應とひきこもり」日本評論者 1999年